

Special Support Education Research Center

## SSERC 通信

(第10号-2008年10月)

国立大学法人 筑波大学  
 特別支援教育研究センター  
 センター長：藤原 義博  
 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1  
 TEL&FAX：03-3942-6923  
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/sserc/>  
 mail：sserc@human.tsukuba.ac.jp

## ■ 巻頭言

## 「マレーシア探訪記」

安藤 隆男

特別支援教育研究センターでは、平成 18 年度から文部科学省の委嘱を受けて、国際教育協力イニシアティブ事業に取り組んでいます。青年海外協力隊員として途上国等に派遣された日本の若い先生方のサポートを行うことが主たるミッションです。私は、この事業の一環で、これまで二度、当センターの先生方とマレーシアを訪問し、実に興味深い「異文化体験」をいたしました。

マレーシアでは、Community Based Rehabilitation(CBR と略、現地では PDK と称す)に基づく障害者支援が福祉制度の根幹をなしています。義務教育は一部の障害種に開かれています。障害がある多くの子どもたちは学校教育の対象となっていないのが現状です。これらの子どもたちは、地域の PDK センターの諸活動に参加するか、障害を重複し、かつ重度な場合は、PDK ワーカー等の巡回指導を受けることになります。

さて、具体的な PDK の指導・支援とはどのようなもののでしょうか。PDK の諸活動を支えるワーカーのほとんどは、地域の一般の人で、専門的な養成教育を受けておりません。海外青年協力隊の若い先生方が一人一人の置かれている状況を推量しながら、保護者や家族に丁寧にアドバイスしているのです。わが国の専門性に基づく指導・支援を具現するという観点からすれば、眼前の一つ一つの現実はある意味で衝撃的なシーンと映るのです。しかし、子どもたちや家族の表情に不安感や、焦燥感はありません。皆で支えあう精神が脈々と息づき、そこは穏やかな空気に包まれているのです。わが国では、特別支援教育制度への転換に伴い、特別支援学校は、地域の様々なニーズに対応する役割が附与されました。特別支援学校あるいは教員の専門性への大きな期待を表すものといえます。インクルーシブ教育を見据える両国間に、実現のプロセスや手続に大きな差異があることに気づかされるのです。

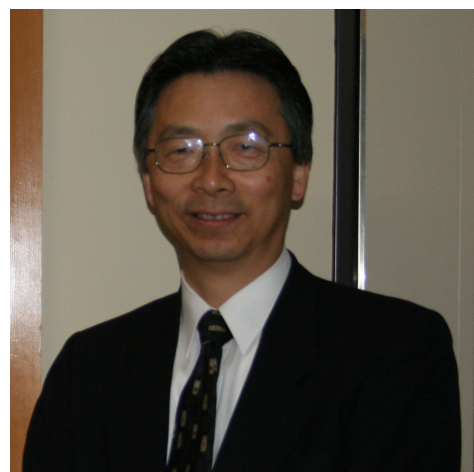
グローバル化の潮流の中で、マレーシアにおいてさえ地域の共同体が崩れつつあるといわれています。子どもたちのあの表情がいつまでも輝きを失わないでほしいと願うとともに、改めて私たちが希求すべき専門性とは何か、おもいをはせるこの頃です。

## ■ 国際教育協力イニシアティブ事業について

本事業も最終年度をむかえ 3 年間の総まとめとして、①国際教育協力ブログの充実、②ブログ等の情報ネットワークで活用する教育素材集の作成、③障害児教育に関わる研修DVDの作成、④マレーシアにおける隊員サポート連携モデルの構築、⑤障害児教育分野の派遣隊員活動ハンドブックの作成に取り組んでいます。また、最終報告としてシンポジウムを予定しています。是非ご参加下さい。

テーマ：「世界にはばたく日本の力—障害児教育分野における青年海外協力隊派遣現職教員サポート体制の構築—(仮)」

日 時：平成 21 年 2 月 14 日 (土) 10:00~12:30 筑波大学東京キャンパス G 5 0 1 教室 (予定)



## ■ 連携研究及び助成研究について

特別支援教育の充実、そして、専門性の継承・発展等を目的とした筑波大学附属特別支援学校での研究および附属学校間で連携して行う研究を、助成研究・連携研究として位置づけています。センターでは研究の推進を図ると共に、経費的補助を行っています。

今年度は、以下の研究がすすめられています。

### 【連携研究】

- ①知的障害特別支援学校における重複障害児への認知学習プログラムに関する研究  
(附属大塚特別支援学校・附属桐が丘特別支援学校)
- ②視覚障害教育で開発された教育的アセスメント・教材教具等を見えにくさのある肢体不自由児へ適用し、有効性を検証する  
(附属桐が丘特別支援学校・附属視覚特別支援学校)

### 【助成研究】

- ①「音声再生システム」“sound reader”で可能となる「新しい教育実践活動」  
(附属大塚特別支援学校)
- ②自閉症児における社会的認知発達支援プログラムの開発に関する研究  
(附属大塚特別支援学校)
- ③通常学級支援のための特別支援学校における教材教具ライブラリーの設置について  
(附属桐が丘特別支援学校)

これらの研究成果については、3月に予定しているセミナー、および、「筑波大学特別支援教育研究」(研究紀要)において、発信する予定です。

## ■ 平成20年度 免許法認定公開講座について

筑波大学免許法認定公開講座は、現職教員の特殊教育教員免許状(特別支援学校免許状)の取得率の向上を目的に平成14年度から開催されてきましたが、平成16年の特別支援教育研究センター開設を期に、障害科学系、附属障害5校、特別支援教育研究センターの連携のもとに、実質上の企画運営を本センターが行って来ました。新免許法下での2年目の開催となった本講座は、12日間11講座の計画で実施することとなり、5月から募集を開始したところ、全国から600人ほど(のべ約1100人)の申し込みがありました。11講座中9講座で定員オーバーとなったため、抽選を行いました。どの教室も期間中は満員状態となっていました。しかし、猛暑の中、受講生、講師陣の熱気があふれる12日間となりました。ご協力くださった先生方には感謝申し上げます。



## ■ 注目スポット紹介

### 筑波大学附属視覚特別支援学校 便利グッズサロン



「便利グッズサロン」とは、見えない見えにくい人にとって便利な道具を実際に触りながら試してみることができるコーナーです。2004年4月より筑波大学附属視覚特別支援学校に開設され、教員とボランティアスタッフが共同で運営しています。

一口に視覚障害と言っても一人一人の見え方は様々です。その人に合った道具を使うことによって生活範囲が広がったり、適切な情報やサポートを受けることにより社会参加も可能になります。子供なら早い時期にルーペや拡大読書器などを使うことによって見える範囲を広げたり、視力の発達や集中力を高めるなど成長の助けになります。中途の視覚障害者ならパソコンの画面拡大ソフトや読み上げソフトなどの便利な道具を使いこなすことで、以前のような普通の生活や就労ができるという希望につながります。

しかし、視覚に障害がある人にとって便利な道具やサポートがあることや、生活上の工夫などは一般の人々にはほとんど知られていません。そして当事者同士が出会い、相談できる場所も圧倒的に少ないのが現状です。そのために、「便利グッズサロン」では視覚に障害があるボランティアスタッフが、見えない見えにくい当事者の立場から、自分たちが実際に試してみて便利な商品を選び展示しています。そして、その使い方のアドバイスや購入方法、生活の不安や負担感を軽減するための情報提供や相談活動なども行っています。

最近では、視覚障害者向けに開発された道具類が、他の障害がある方々にとっても役立つことが分かってきて、肢体不自由や知的障害の特別支援学校などと積極的な情報交換も行っています。また、出張展示・体験会などの要請にも応えています。これからは、様々な障害者が望む商品をメーカーと共同で開発する場となることも目指します。

2007年からは、毎月第2水曜日の定例開催日の他に、第4土曜日は「視覚技藝」と称する拡大読書器などの体験・相談教室を行ったり、「ハンディキャップテニス体験会」や「音声解説付きDVD映画上映会」などを開催し、障害者のためのレクリエーション活動などにも焦点を当てた活動を開始しました。

この「便利グッズサロン」はまだ開設したばかりですので、一つ一つの活動がまさに「試行錯誤」の連続ですが、ご興味のある方は、是非一度お立ち寄り下さい。

### ● サロンの開設日・時間

毎月 第2水曜日・第4土曜日  
時間 午前10時30分～午後4時30分

### ● サロンの機能

便利グッズ体験場所の提供  
本校内外の来訪者に対する相談支援  
視覚障害関連情報のリソース機能  
視覚補助具（ルーペ・単眼鏡・拡大読書器など）の貸し出し、国内外の便利グッズ新製品の情報収集とその発信、便利グッズ製品の研究開発、サロン機能の啓蒙・普及活動、各種体験会、講演会等の企画と実施

### ● 展示しているもの

パソコン用画面読み上げソフト拡大読書器、パソコン用画面拡大ソフト、遮光眼鏡、キッチン用品、ルーペ、日常生活用品、文房具、点字器、時計など

### ● 所在地

筑波大学附属視覚特別支援学校内464教室  
〒112-8684 東京都文京区目白台3-27-6  
TEL/FAX 03-3943-5439  
ホームページ <http://benri-goods.net/>  
メール [b-salon@nsfb.tsukuba.ac.jp](mailto:b-salon@nsfb.tsukuba.ac.jp)



【サロン入り口】



【展示コーナー】

【音声時計・計算機】



【拡大読書器】

## 【 現職教員研修 修了生の声『苦言・提言』 】

私は特別支援教育研究センターの現職教員研修に1年間参加して、センターや附属学校の先生方に直接ご指導いただき、自ら活動することで多くのことを学ぶことができました。アインシュタインの言葉に「何かを学ぶためには、自分で体験する以上にいい方法はない。」とありますが、本研修に参加して私はそれを実感しました。

現職教員研修生としてはじめて特別支援教育研究センターを訪れた時は、これからどんなことを学べるのだろう、経験できるのだろうという思いでいっぱいでした。

研修が始まると、センターでの講義、附属学校での研修、夜間講義の聴講等々と、目まぐるしい日々が続きました。これほど研修に専念できることはきっともう2度とないのだから、とにかくなんでも吸収しようと思いがむしやりに活動した1年でした。多くの先生方にご指導いただきながら研修報告書を作成し、研修成果報告会での発表を何とか無事に終わることができた時には、思わず力が抜けてしまいました。

現場に復帰してからは、気持ちだけが空回りすることも多かったように思いますが、それでも、研修中に学んだことを生かそう、もっともっと学んでいこうと努力してきたつもりです。

あらためて研修期間を思い起こしてみると、様々な思い出が胸を去来します。お世話になった先生方の言葉一つひとつ。朝6時に地元宇都宮を出て、帰宅するのは0時前後になることも多かった日々。語り合い、励まし合ったかけがえのない仲間達。全てが自分の財産です。研修生として過ごした1年間は、特別支援教育に微力ながらかわる自分にとっての原点になったと思っています。今後も研修を重ねながら現場で実践していくことで、お世話になった先生方に少しでも御恩返しができる、と考えています。



(平成17年度 修了生 栃木県立岡本特別支援学校 藤本 勝 )

## ■ 巻末言

ある聾学校の3歳児学級を参観していたとき、隣の子の椅子の脚が自分の足に当たったS君が「くつしたがいたい！」と言いました。担任の先生は「足が痛い」のだということを適切に教えていましたが、私は「自分の言葉で話す子はいいなあ」と感じます。2歳児のJ君は、重い買い物袋を持ったときの手に付いた痕を見て「おおい」という言葉を覚えました。あるとき靴下を脱いだときの自分の足のゴムの痕を見て指さして「オモイ」と言いました。知っている言葉を自分の体験に合わせて自分で使ってみる、子どもは大した存在です。同じようなことが手話の獲得でも見られます。両親がろう者のC君は、1歳児の時、立てた人差し指を自分自身に向けて「ママ」を表し、これが二人称“you”へと変化していきました。母親との関わりの中で獲得された言葉です。

聾学校の教員や言葉を指導する立場にある者は、こういった場に遭遇すると即座に適切な正しい表現に置き換えて投げかけるスキルを身につけることが重要とされています。実際、聾学校の授業研究会等では子どもの表現を修正したり広げたりする方法が具体的に指摘されます。これはこれとして基本的に大事なことです。しかし、それはそれとして、言葉は子どもが自ら獲得するもので指導されるものではないということも言葉を扱う教員は心に留めておく必要があると思います。

聴覚障害の場合、「食べる」という言葉を覚えた後、意味につながる動作が視覚的に似ている「かじる」「かむ」「くわえる」という言葉に広がっていかない場合があります。場面をとらえていちいち教えていく必要もあるでしょうが、その扱いは中心的ではなく「食べること」と「噛むこと」の違いを認識させる指導の中で、子ども自身の表現しようとする意欲をとらえて、“ちょん”と指先で背中を押して手伝うというような感覚……、これをきめ細かく行うことが“言語指導”には必要なのではないかと感じます。(庄司)